

編集後記

バーゼルでひらかれた国際リハビリテーション医学協会（IRMA）第3回大会に出席した。今回の国際学会は参加者も多く、多数の分科会場で多岐にわたる多彩なプログラムが組まれ、朝早くからの研修会が毎日あったりして、非常に充実していた。日本人の参加者も50人前後はあったようで、演題発表も10数題に及んだ。数だけでなく内容的にも他国の発表に比して決して遜色のないものが多かったが、シンポジウムやパネルにとりあげられたものがないなど、欧米諸国の発表にくらべハンディをつけられていたことは否めない。しかし、学問の国際化時代を迎えて、日本のリハビリテーション界も国際舞台への進出をもっと真剣に考えなければならないし、また世界の学界も次第に日本に注目を寄せつつあることを強く感じさせられた。

さて8月号は「施設におけるリハビリテーション」の特集である。今田氏は各種社会福祉施設の歴史的背景、最近の動向などを批判的に検討しつつ、施設の体系とその中でのリハビリテーションの位置づけについて詳しい資料をもとに論じられた。古川氏は東京都の

ハーフウェイハウスの経験を中心に中間施設におけるリハビリテーションについて述べ、山口・上田は、全国のアナケート調査を通してみた老人ホームでのリハビリテーションの実態を報告した。安藤・堂本氏は療護施設におけるリハビリテーションを実際経験を通して論じられた。最後に座談会では小池、山形、高橋、江口、大川の各氏から肢体不自由児施設の現状と今後の課題についてつっ込んだ議論がいただけた。曲り角にあるといわれる肢体不自由施設について考える上での指針となれば幸いである。

巻頭言で佐藤氏はリハビリテーションと障害者福祉との密接な関係を強調し、「障害者福祉は健常者の責務である」と説いておられる。バーゼルの学会の前後にヨーロッパ各国を訪れて、それらの国々でのリハビリテーションが社会保障制度と障害者福祉の伝統に厚く裏打ちされていることにあらためて感嘆したが、日本でも佐藤氏の言葉が常識となる日が早くくるように切に望むものである。

（上田 敏）

編集顧問

天 児 民 和
大 島 良 雄
小 池 文 英
砂 原 茂 一
津 山 直 一
水 野 祥 太 郎

編集委員

明 石 謙
上 田 敏
大 井 淑 雄
大 川 嗣 雄
荻 島 秀 男
土 屋 弘 吉
横 山 巖
千 野 直 一

編集同人

赤 津 隆
今 田 拓
今 村 哲 夫
江 口 寿 栄 夫
小 野 啓 郎
河 邨 文 一 郎
五 味 重 春
沢 村 誠 志
杉 山 尚
武 智 秀 夫
永 井 昌 夫
中 村 隆 一
野 島 元 雄
間 得 之
長 谷 川 恒 雄
橋 倉 一 裕
平 方 義 信
福 井 冨 彦
三 島 博 信
渡 辺 英 夫
飯 田 卯 之 吉
遠 藤 千 恵 子
小 川 孟
加 藤 一 郎
小 島 蓉 子
笹 沼 澄 子
鈴 木 明 子
高 田 玲 子
陳 慧 玉
土 屋 和 夫
松 村 秩
(以上五十音)
(順、敬称略)

（細田、鹿島）

次号予告（第6巻第9号）

特 集 四肢の先天異常とリハビリテーション

四肢奇形の臨床……………名古屋大 杉 浦 保 夫
わが国におけるサリドマイド胎芽病児……………横浜市大 土 屋 弘 吉
両上肢障害者の日常生活動作障害と

その対策……………都身障センター 大 瀧 憲 一
両上肢障害者の生活実態調査報告……………「いしづえ」事務局 泉 順
両上肢障害者の高校および大学進学の問題……………桐が丘養護学校 渋谷 久

講 座 筋・神経系の電気診断（9）（動作筋電図）……………日大 佐 野 精 司

一頁講座 リハビリテーション用語集（3）……………拓杏園 今 田 拓